

## 川野ナツダイダイの施肥法について

中路正紹・村上義勝・土田通彦・\*岩本数人・\*\*榊 祐子

(熊本県果樹試験場・\*JICA ウルグアイ果樹研究プロジェクト・\*\*熊本県農業試験場)

Masatsugu NAKAJI, Yoshikatu MURAKAMI, Michihiko TSUCHIDA, Kazuto IWAMOTO, Yuko SAKAKI :  
Studies on Fertilizer Application Method to Kawano Natsudaidai

熊本県下の中晩相産地では、現在、中耕、摘果、間伐、有機物の増施など、栽培管理を集約化して、大玉生産と果実の高品質化を図っているが、本報では、高品質果実の生産を主眼に施肥の面から、川野ナツダイダイに対する影響を検討したので、その結果を報告する。

### 1. 試験方法

1974年に川野ナツダイダイの3年生苗を植栽した場内の平地畑(黒雲母片麻岩を母材とする軽植土)で1978年～1985年にかけて、樹の生育、収量、葉分析、果実品質について検討した。試験区構成は次のとおりである。

第1表 試験区構成

区 分	施肥量	種 類	春肥	夏肥	初秋肥	秋肥
1) 甘夏配合標準施肥	300g/本	有機配合肥料	35%	30%	20%	15%
2) 1)の晩秋施肥	300	〃	35	30	20	15(15日遅れ)
3) 化成肥料標準施肥	300	硝安加里	35	30	20	15
4) 高有機配合	〃 300	動物有機配合	35	30	20	15
5) 1)の7割施肥	210	有機配合肥料	35	30	20	15
6) 1)の15割施肥	450	有機配合肥料	35	30	20	15
7) 9月重点施肥	300	有機配合肥料	20	20	40	20
8) 11月重点施肥	300	有機配合肥料	20	20	20	40

### 2. 結果及び考察

施肥量の違いによる影響をみると、樹の生育は、主幹周、樹容積とも配合標準施肥区(10a当たりNで30kg)の3割減、5割増では現在まで目に見える効果は表れてはいない。しかし、葉中成分のNでは施肥量に応じたレスポンスを示している。また、収量においては、樹容積のやや小さい配合標準施肥区が1樹当たりは少ないが、㎡当たりでは区間差は判然としない。

果実の肥大では、施肥量が多いほど大きい傾向にあり大玉生産を目的とするなら施肥量の増加を考慮する必要がある。

果実の品質面からみると、配合標準施肥区が糖度、着色及び可溶性固形物とも優れている。クエン酸含量は、減肥すると高くなる傾向がみられる。

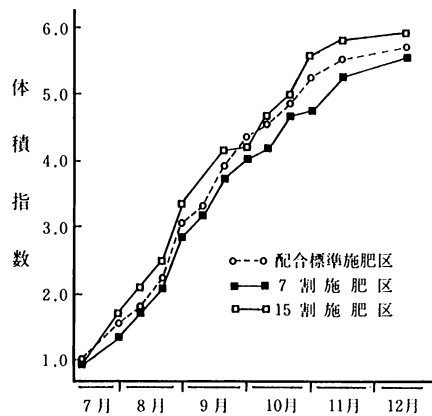
施肥時間の違いによる影響をみると、樹の生育では年次の推移と共に主幹周、樹容積とも11月重点施肥区が大きい傾向にあり、また、収量でも11月重点施肥区が優れている。

果実品質では、配合標準施肥区は着色も良く、糖度、可溶性固形物も高い。しかし、クエン酸含量は晩秋施肥区、11月重点施肥区が配合標準施肥区より低い傾向にある。また、果肉歩合は11月重点施肥区が高い傾向にあった。

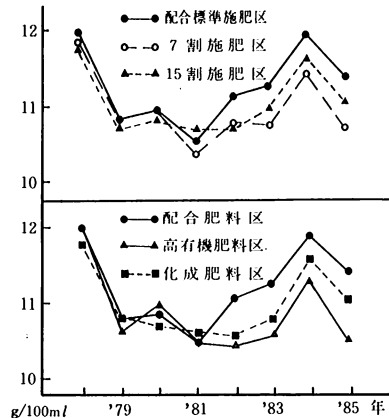
肥料の種類別の影響をみると、樹の生育では試験開始当初、主幹周の伸び率で化成肥料区が大きい傾向にあるが、後半では高有機肥料区が主幹周の伸び、樹容積とも良くなっている。また、1果平均重も高有機肥料区で大きい傾向がみられた。これは化成肥料も年4回の分施ではあるが、それよりも高有機肥料の肥効が長期にわたることに起因していると考えられる。

果実品質は配合肥料区で糖度、可溶性固形物が高い傾向にあり、化成肥料区はクエン酸含量が高く、高有機肥料区はクエン酸、糖度とも低い傾向にある。

葉中成分は、化成肥料区、次いで配合肥料区、高有機肥料区の順に高い傾向にある。これは高有機肥料の無機化率の低いことに原因があると思われる。



第1図 川野ナツダイダイの肥大状況



第2図 果実品質(可溶性固形物)